



福岡の工芸 1 甘木絞り

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 絞り染めの技術

絞り染めの基本的な技術は、布地を糸で縛ったり、縫ったりと圧力をかけて染料が入り込まないようにして染めずに文様とすることです。この絞り染めは、多くの染色技術の中でもっとも原始的な技術です。しかしながら、世界各地で行われ、独自に高度な技術を発達させた地域も少なくありません。日本も絞り染めの技術が大きく発達した地域で、技法は実に百種に近く、世界最高峰の位置にあるといっても過言ではありません。

日本の絞り染めに見られる主要な技法には、布地を両面から板をあて強く縛る「板締」、括りによる「匹田（鹿子）絞り」・「三浦絞り」、縫締めによる「平縫絞り」・「折縫絞り」、竹の皮やビニールなど防水性のあるもので染めないようにする「帽子絞り」などがあります。珍しいものでは、桶の中に入れて密封し、外に出した部分だけを染める「桶絞り」、太い丸棒に布地を巻きつけて縛る「嵐絞り」などもあります。これらの技法を用いた絞り染めの特徴は以下の通りです。

- ① にじみなど微妙な色調の変化が出る。
- ② 布の「両面」を染めないで白くする。型染めや筒描きなどは、両面に糊を置かないとできない。
- ③ 布を染料につけて染める「浸し染め」のため、ほとんどの場合、藍もしくは紅など一色。
- ④ 布を縫う、括るなど手を加えるので、布に凹凸ができ、それ自体が絞り染め特有の風合いとなる。
- ⑤ 下絵や図案を使う場合もあるが、手先の感覚だけを頼り行う技法がある（「蜘蛛絞り」など）。
- ⑥ 文様を点や線で表現するので、具体的な文様表現が難しく、多くは抽象的で簡略な文様となる。

2 絞り染めの歴史

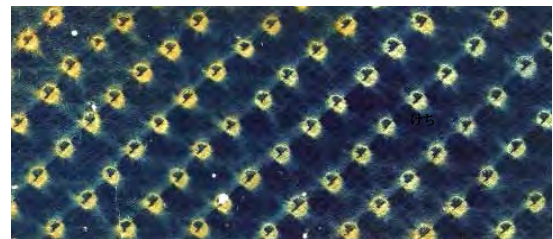
絞り染めの歴史は特にインドや中国が古いと言われ、中央アジアのアスターナ古墓（6世紀）からは絞り染めを施した布が出土しており、中国の歴史書などの記述から、4～5世紀にはその生産が始まったと推測されています。

日本では、『日本書紀』に天智天皇6年（667）に「錦十

四匹、纈十九匹を送る。」と記され、「纈」という漢字が絞り染めをしめす漢字になるほか、『東大寺献物帳』には「目交」などの文字も見えます。奈良時代の正倉院宝物の中に絞り染めの布があります（図1-3）。

平安時代以降も絞り染めは行われていたようで、『延喜式』の中に「大纈」「一目纈」「二目纈」「作目」「目染」「纈」「くくり染」「くくし染」などの文言から絞り染めの技術が発展し、その種類も増えていることがわかります。鎌倉時代になると「重目結」「三滋目結」「三目結」という新しい文言も見え、室町時代から江戸時代初期まで盛んに作られた絞り染めが「辻が花染」で、至高の意匠が開花しました。

戦国～江戸時代前期に、九州では肥後・高瀬、豊後・鶴崎で絞り染めを作り始めているようで、江戸時代後期には、筑前の博多・甘木でも生産が開始されます。



こんじめゆいもんこうけつめ
図1 紺地目結文纈縹布【鹿子絞り】
(正倉院伝来品 奈良時代8世紀 東京国立博物館蔵)



あかじつほうもんこうけつひらきぬ
図2 赤地七宝文纈縹平絹【縫絞り】
(正倉院伝来品 奈良時代8世紀 東京国立博物館蔵)



こんじたすきこうしもんこうけつひらきぬ
図3 紺地襷格子文纈縹平絹【板締】
(正倉院伝来品 奈良時代8世紀 東京国立博物館蔵)

3 甘木絞りの歴史と特徴

甘木絞りのその始まりはどのようなものだったのでしょうか？現在、いくつかの説がありますが、いずれも定説には至っておらず、ここでは3つの説をご紹介します。

- ①豊後の人、中津在住の医師である三浦氏の妻が甘木地方に絞りを伝え、「三浦」と称した。
- ②豊後・中津木綿の晒しを小石原川で行っており、豊後絞りの制作過程の一部を甘木で担っていた。
- ③『福岡藩民政略誌』に、福岡の孫兵衛を始祖とする紅絞りを施す博多絞りが甘木に伝えられ改良した。

①は類似する伝承が有松・鳴海にあり、豊後絞りを有松鳴海に伝えたのが、竹中備中守の侍医・三浦玄忠の妻といわれます。三浦姓の医者とその妻が伝えたという伝承の骨格が同じです。甘木の絞り染めが豊後絞りから伝わった可能性を暗示し、絞り染めの文化において豊後が甘木よりも歴史が古いことも分かります。

②は、小石原川は水量豊富な清流で、石灰質を含んだ水質が木綿晒しに適し、実際に中津木綿の晒しが盛んでした。後年、甘木絞りの布晒し(図4)は筑前甘木名所十景になるほどでした。これは豊後から甘木に絞りの技術が伝わった可能性が高いことを示唆します。

一方で、③の説も興味深い。『福岡藩民政略誌』(明治20年発行)「博多絞の起源」には、「博多にて木綿を綵纈して染ること、其始をしらず。明和中に成りし石城志、博多土産考に、紅絞最美好なりとあるこそ、書に見えし始なれ。無名書に宗像郡福岡に孫兵衛というものありて、紅染せしを延享二年藩主命じて、福岡に移されたりとするせり。もし是や後に博多に転居せしか。」とあり、明和年間(1764-72)に博多土産で紅絞りが



図4 甘木川の木綿晒しの様子
(甘木歴史資料館蔵)

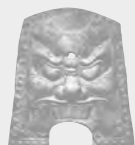
有名であること、また、延享2(1745)年に紅染があったことが確認できます。本書はさらに「甘木の木綿絞は、博多より伝えしか。今に至ては其盛なる事、博多に愈れり。」とあり、博多絞りから甘木絞りへの技術伝播を推測しています。しかし、豊後絞りと甘木との近い関係は①②のとおりで、実態は単純ではありません。

『筑前国続風土記』には、文政年間(1818-30)甘木に染工九戸が記されています。江戸時代の風俗書の喜田川守貞著『守貞漫稿』に文化・文政頃までは鳴海絞りを、天保年間(1830-43)には博多絞りを用いたと記されます。明治10年(1877)第一回内国勸業博覧会の出品解説に、博多・甘木の絞り染めの年間生産額が全国一位と記されました。大正3年(1914)には生産高は30-50万反に及び、販路は国内のみならず韓国や台湾にも拡大し、最盛期をむかえました。しかし、昭和17年(1942)に繊維類統制により博多絞り、甘木絞りはほとんど休業状態になります。昭和26年(1951)には、甘木絞りの産業は終焉を迎えました。

最後に甘木絞りの特徴を記しておきましょう。図5木綿地城郭風景文着物を見ると、主として使用される絞り技術は、鹿子絞り、巻き上げ絞り、帽子絞りです。そして、絞り染めとしては難しいはずの具象的な文様(城郭や橋など)を施します。鹿子絞りを多用し、帽子絞りの白抜きを効果的に配することも特徴です。甘木では、そのほか豊後(三浦)絞り、縫い絞り、白影絞りなども見られます
(学芸調査室 遠藤啓介)



図5 木綿地城郭風景文着物
(甘木歴史資料館蔵)



編集 発行: 令和元年12月10日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/>